
『ガエターノ・ドニゼッティ～ロマン派音楽家の生涯と作品』

<目次>

はじめに

- 序章 「ドニゼッティ研究家」グリエルモ・バルブラン
- 第1章 フクロウの飛翔
- 第2章 ボローニャ時代
- 第3章 困難な出発
- 第4章 ローマ、ナポリそしてミラノ
- 第5章 オペラ作曲家という哀れな職業
- 第6章 「ドッツィネッティ」対ドニゼッティ
- 第7章 個性の認識
- 第8章 『愛の妙薬』とドニゼッティの新しい喜劇のキャラクター
- 第9章 フェッラーラの宮廷で、パイロン、ゲーテ、ユゴーと共に
- 第10章 ナポリの王立音楽院の教授とパリのイタリア歌劇場付き作曲家
- 第11章 愛と死のドラマ『ルチーア』
- 第12章 英雄的リリシズムと遊びの世界での小休止
- 第13章 1837年 この上ない悲しみの年
- 第14章 1838年 『ポリウート』の誕生とイタリアとの別れ
- 第15章 オペラ、グランドペラ、オペラ・コミックの狭間で
- 第16章 「優しい心」の時期に
- 第17章 宮廷音楽楽士長としてモーツァルトのポストに
- 第18章 人間の幻想についての最後のコメディ『ドン・パスクワレ』
- 第19章 ヴィーンとパリの間 多忙な生活の幕引き

『ガエターノ・ドニゼッティ～ロマン派音楽家の生涯と作品』からの抜粋により構成されています。

オペラ作品などタイトルは「**オリーブ色**」、訳者がより強く伝えたい箇所は「**オレンジ色**」、ホームページ掲載にあたって本書よりカットされた部分は「**濃い青色**」で[・・・]と表示されています。

第19章

ウィーンとパリの間 多忙な生活の幕引き

《みんな同じ道を歩みます！これからも歩みます。[・・・] 神様の思し召しで私は生きて
いるのですが[・・・] 私の望みは死ぬことしかないのです。》(ドルチ宛、1844年4月8日)

《4日前からウィーンにいます。7日にパリを発って、カールスルーエ、シュトゥットガルト、ミュンヘン、ザルツブルク、リンツを経て、そしてウィーンに着きました。》宮廷楽士長と宮廷作曲家としての自分の任務を果たすためにウィーンに戻ったガエターは、1843年1月21日、このように友人ペルスイコに書いている。今回は自ら望んでの帰途であった。というのは、パリとは逆に《ウィーンは本当に落ち着いて仕事ができるし、(気候を除けば)とても居心地良いところだ》からである。

3月3日の「楽友協会」でのコンサートでの奉獻歌『**アヴェ・マリア Ave Maria**』、[・・・]4月14日(聖金曜日)の王室礼拝堂で行われたコンサートでの、これもフェルディナント皇帝に献上された、合唱とオーケストラ付きの4声の『**ミゼレーレ Miserere**』[・・・]、オペラ『ルチア』の再演(1月28日)および『シャムニーのリンダ』の再演(4月2日)、ウィーンでの『ドン・パスクワレ』の上演(5月14日)および『**ゴルコンダの女王 La Regina di Golconda**』の上演(5月23日)[・・・]、それ以外にヴェルディの『ナブッコ **Nabucco**』公演(4月4日)の上演準備、および弟子マッテオ・サルヴィのデビュー作品である『**プリマ・ドンナ La Prima donna**』の監督も引き受けていたし、さらに、『**カテリーナ・コルナーロ Caterina Cornaro**』を書き上げねばならなかったし、新しいオペラ『**ローアンのマリア Maria di Rohan**』の上演に没頭してもいた[・・・]。

1843年6月5日、ウィーンのケルトネルト劇場においてガエターノ自身が指揮をした『ローアンのマリア』は、聴衆の熱狂的な歓迎を受けた。[・・・]およそ1カ月のあいだに、その熱狂的な感激ぶりは13夜も繰り返されたのである。[・・・]

7月にパリに戻ったドニゼッティは、その1カ月後、すでに制作協力者のポール・ラクロワ Paul Lacroix とコンタクトを取っていた。それは、一つには、[・・・]この新作オペラのリブレットを翻訳させるためであり、また一つには、パリでの成功が《ウィーンでこの作品が収めた成功》と同じくらいのものであった際、《地方の劇場のために、フランス語の手直しをする場合》に必要な変更をそこに加えるためであった。変更は少なくなかった。それは、パリでは《他のどこよりも音域が高い》という音の高さによる問題だけでなく、とくにそのシーズンのパリの歌手の中に、ジュリア・グリーズィ、ロレンツォ・サルヴィといつもながらのロンコーニに加えて、“プリマ・ドンナ”がもう一人いたことが原因である。ミラノ

出身のコントラルト、マリエッタ・ブランビッラ Marietta Brambilla というこの“プリマ・ドンナ”の存在によって、カンマラーノは予定していなかった4人目の登場人物を無理やり作り出さざるを得なかった。つまり、もともとは端役だった廷臣の一人に、アクション全体の流れの中の一人物として、重要性を負わせる必要があった。そこでドニゼッティは、テノールが歌うはずのアルマンド・ディ・ゴンディ役をコントラルトの役にし、[・・・]2つの重みのあるアリアでもってその役を際立たせた。これらの挿入によって、[・・・]ブランビッラを喜ばせ、さらに、[・・・]パリの聴衆を満足させたのである。しかしそれは[・・・]劇的効果をまったく持たない挿入であり、このオペラ全体の統一性も乱していた。[・・・]

総括的には、この『ローアンのマリアーア』は、晩年の「悲劇のドニゼッティ」をとりわけ象徴している作品と言える。一つは、貴族的で内面的なオペラであるということ。―― 群衆の参加を削り、メロドラマのあらゆる荘厳さを放棄し、まるで殻の中に閉じこもっているかのようである。一つは、オーケストレーションの上では激しいけれども透明さを保った作品であるということ。―― 音楽喜劇の典型であるアクションの素速さを、悲劇的な人物にそぐわせることによって、オペラ・セーリアを内部から改革している。一つは、アリアとレチタティーヴォのあいだの叙情的緊迫感の差をなくそうとするやり方の雛形となっていること。―― つまり、今回のアリアは、常に短く、旋律的には簡潔で、3部形式のドグマから解放され、フレーズの流れが自由である。そしてレチタティーヴォは、アリアのような歌う感じの朗唱から表現豊かな「喋り」、さらにはリズムカルに音節一つずつを発音する言葉の読み方に至るまで、多岐にわたっている。そして一つは、ドラマ性を守りとおしたという証言になっていることである。―― [・・・]真の美というよりもむしろ、優しい郷愁が顔の上に描かれ表れている人物と同じように、心の中に残るのである。

『ローアンのマリアーア』の成功の後、ひと月ちょっと経った1843年7月11日、ドニゼッティはヴィーンを後にし、およそ10日間くらいでパリに着く。[・・・]

パリではドニゼッティは、[・・・]新作の“グランドペラ”にかかわるいつもながらの困難にふたたび遭遇するのだった。16,000フランという高額な報酬が支払われたそのオペラは構成や叙情的・ドラマ的価値観においてかなり異なった作品を創造した、実り豊かな1年間を締めくくる作品になっただけでなく、ドニゼッティのすべての創作の幕を引く作品にもなった。[・・・]5幕ものの『ポルトガルのドン・セバスティアーン』 [フランス語版のタイトルは『 』] という、パリのためのオペラ[・・・]、いつ

ものごとく、いやむしろいつも以上に執拗に、ガエターノはリブレットの制作に気を配り、あのスクリーンに（！）簡潔さと、効果的で真実性のある舞台を追求するように求めていた[……。]。上演のためにオペラ座は、3年前の『ラ・ファヴォリート』に出演したと同じ歌手を集めた。すなわち主要な配役は、メゾ・ソプラノのロズィーナ・シュトルツ（ザイダ役）、テノールのジルベール・デュプレー（ドム・セバスティアン役）、バリトンのポール・バロワレー（カモエンス役）、バリトンのジャン・マソル（アバヤルド役）、そしてバスのニコル・レヴァセール（ドン・ホアン役）である。[……。]

作曲家の人生のロマン派的な運命を完全に、しかも荘厳に含んでいるこの『ドム・セバスティアン』は、ドニゼッティの創作した最後のオペラであり、しかも彼自身の芸術的遺言ともいえる作品で、[……。]《究極の暗さ》をもつ作品の「決定的な時」の目印となる不吉な戦慄は、あたかも死に至るまで容赦なしにガエターノにつきまとう、あの悲劇的な運命の陰鬱な兆しのように響く。

1843年12月20日、《犬のようにあくせく働いて疲れ果て》、パリで2つのオペラを上演するというひじょうにきつい仕事が原因で病気をし、それによって衰弱していたドニゼッティは、パリからウィーンに向けて発つ。1年間の中で、パリーウィーン間の旅はこれで3回目になる。そのうち今回は一番ひどかった旅で、ウィーンに到着した1週間後の1月6日に義兄に宛てた手紙によると、《最悪の道と相当な寒さの中を1日に15時間か16時間走った》とある。いづれにしてもこの《愛するウィーン》は、ドニゼッティが常に強く求めていた避難場所ではあったが、後になってガエターノは、オーストリア帝国の首都ウィーンの、まさにメランコリーを感じさせる静寂さと、とりわけその気候を、自分の心身の衰えの理由にしていた。

《ウィーンは私の気分を滅入らせませす。その気候は体にいいとは決して言えません。憂鬱です……。そう長くは耐えられないでしょう！》と、その年の10月に、義兄のトトに、事実このように零している。

火山のように曲のアイディアが噴きドニゼッティを思えば、病気のためとしか考えられないこれらの疲労の症状が原因で、彼はオペラ劇場のための契約を断り始めた[……。]。

兄のジュゼッペ夫妻がコンスタンチノーブルから6月5日、ウィーンに着いた。夫妻はその後、いくつかの用事を済ませ、ジェノヴァにいる息子のアンドレアの卒業式に参列するためにイタリアに向かうことになっていた。それに合わせて、切迫した期限から解放されたドニゼッティは、ふたたびナポリに戻ろうと決心する。他の用もあったが、4月8日、彼がドルチに書いているように、《[ウィーンの家のために、ナポリの家の家具を] 売ったり荷造りしたりするためです。……その時は私にとって一番辛い時でしょうが、でもやらねば！ そう、7年も[ヴィルジーニャが死んだ] あの部屋の扉が閉まったままなのです。……開けて……売って……発って……そして遺体はそこに残します[現に、ガエターノは彼女のお墓を建てさせた] ……》。

7月13日にウィーンを発って、21日にベルガモに着いたドニゼッティは、ドルチといっしょに海経由で、8月12日、ほぼ2年ぶりに“自分の”家に帰った。ナポリで、9月5日にコンスタンチノーブルに帰る《トルコの兄〔ジュゼッペ〕》と〔生前の〕最後の再会をし、またナポリの温かい環境の中で、とりわけ、すでに述べたとおり、シュテルリッヒ家の人たちとのますます深まる親交のおかげで、ドニゼッティは昔の明るさを取り戻すのであった。ヌオーヴォ劇場で『ペトリー』を上演した後、ガエターノはドルチとともに旅を続け、9月14日、ローマにいる義兄を訪れるために〔ナポリを〕発つ。ローマで急にノスタルジーに襲われたドニゼッティは（《私は〔ナポリに〕喜びを置いてきてしまいました。また悲しい毎日に戻ります》と友人ベネヴェントに宛てた19日の手紙に書いている）、サン・カルロ劇場の開幕を口実に、ドルチを一人でフィレンツェ、ベルガモへと発たせて、自分だけ義兄のトトと、4人のヴァッセルリ家の姉妹《の連中》といっしょにナポリに戻ることにした。今回は、病気をしていたことと、『ローアンのマリア』のナポリでの上演ということもあり、10月3日から11月14日までの、少し長い期間の滞在となったが、その後、ドニゼッティは慌てて旅立つのだった（《それでも、この地を離れなくてはならないのです！》と、ローマに戻った義兄に宛てて書いている）。ロッシーニに頼まれていたにもかかわらず、ボローニャでの『ローアンのマリア』の公演を辞退して、11月23日ベルガモに、そして翌月5日、ウィーンに戻るのである。

こうして、ドニゼッティにとって、もっとも悲しい冬の一つが始まる。気候の厳しさや、言葉の問題で《ほんの僅かの人としか話ができない》こと、そして何よりもシュテルリッヒ侯爵の娘に寄せた叶わぬ思いのためである。郷愁の念と不吉な予感でいっぱい冬であった。

〈悲しみに包まれながらベルガモを離れました。私が到着した2日後、マイル先生が寝込んでしまい、もう会えないのではと心配しています。[・・・]〉

その後、ますます頻繁に病気の兆候が現れるようになった。もう2年も前からガエターノは、ちょっとした不調を感じていた以外にも、激しい頭痛を伴った神経熱に悩まされていた。[・・・]これらは脳脊髄疾患の前兆であり、症状や結末、解剖の結果から見ると、ドニゼッティの精神的・身体的能力に少しずつ麻痺をおこす一種の梅毒であったと、現代になってから診断された。

パリから届いた手紙や知らせを見て心配になった友人たち——とくに義兄が——が、イタリアへ戻ってくるように説得しようとしてガエターノに書いている（《ああ、あなたに会えたら、どれほど嬉しいか……》と、フェツレッティは書き送っている）。その後、彼らは兄のジュゼッペにどうしたらいいかと相談し、ジュゼッペが息子のアンドレーアをパリに向かわせたのである。アンドレーアがパリに着いたのは、1カ月半（！）かかった後のクリスマスの日であったが、叔父のガエターノがもう一度ヴィーンに行こうとしているのを、ぎりぎりでも止めることができた。その間、12月2日にマイルが亡くなったのであるが、その知らせはドニゼッティには届かなかった可能性が強い。叔父ガエターノの病状が重いと判断したアンドレーアは、精神病専門医のリコール Ricord、カルメイユ Calmeil、ミテイヴィエー Mitivie の3者による合同の診察をしてもらおうと決心する。1846年1月28日、診察があり、結局、ミテイヴィエー自身が経営する（！）イヴリーの精神病院にドニゼッティを隔離するという結論に至った。

2月1日、ヴィーンへ出発すると欺かれたガエターノは、パリの近くにあるイヴリーに連れて行かれる。そして、まずは馬車が故障したこと、それから召使のアントーニオが旅の途中でドニゼッティのものを盗み、そのためにより深い取り調べが必要だということを口実にドニゼッティは入院させられる。[・・・]

このような強制的な、ほとんど完全に近い隔離によって悪化した麻痺症状は、過酷にもどんどん進行していった。春になって、ナポリから来たゲッツィや、ロワイエー、ヴァエズ、デュプレー、モンテラーズィ、アックルスィ、ランノワ男爵、レーヴェンシュタイン家のソフィアらの、ほんの限られた友人だけがドニゼッティを見舞うことを許された。

ヴィーンの国立音楽学院の元校長でありドニゼッティの友人でもあったランノワ男爵が、ジュゼッペ宛てに、ガエターノをパリに連れ戻さなければ法廷に訴えると遠回しに示唆した手紙を送った後で、1847年3月4日、アンドレーアはふたたび旅立ち、4月23日にまたフランスに入った。しかし、叔父のドニゼッティはほとんど抜け殻同然になってしまったようで、もう

生きながらの亡霊のような状態になっていた。ともあれ6月23日に、ようやく警視總監の許可を得て、17カ月間近く入院したイヴリーの “健康の家” [精神病院]を離れることができ、[・・・]パリのシャトープリアン通り6番地の部屋に帰ることができた。[・・・]

新しい環境、馬車での頻繁な散歩、兄フランチェスコの到着、音楽出版社の社長リコルディやルッカなどの友人たちの見舞い、等々は、いくらかよい効果をもたらしたように見えた。しかし6人の医師の何回かの合同診察において過半数の医師が賛成して、ドニゼッティがイタリアへの旅に耐えられると結論づけた8月17日、またも警察が介入してきて、患者ドニゼッティの、いつもの馬車での散歩さえ禁じたのであった。憤慨したアンドレアは、[・・・]外交的な圧力によって、[・・・]9月19日に1年半以上の信じられない不条理な囚人状態から逃れ、ようやくベルガモに向けて出発することができたのである。

車でアミアンまで行き、そして馬車でブリュッセル、スイス、ゴッタルド峠、コモを経由して、10月6日、ガエターノは生まれ故郷に戻り、ローザとジョヴァンニーナ・バゾーニの家に迎えられた。ガエターノはその家で、この2人の女友達と、従順なアントーニオ、ベルガモの裁判所によってドニゼッティの財産管理人と指名されたドルチらに温かく見守られながら、意識のないぼんやりとした毎日を送り、1848年4月8日、静かにこの世を去るのである。

ドニゼッティは、ヴァルテッセの墓地にあるペッツォーリ家の礼拝堂に埋葬された。1875年に遺体が掘り出され、サンタ・マリーア・マッジョーレ教会に運ばれ、彼が愛し決して忘れることのなかった師マイルの墓の隣の、ヴィンチェンツォ・ヴェーラ Vincenzo Vela が碑銘を彫った墓に納められた。